

人間は自由なものとして生まれたが、  
いたるところで鉄鎖につながれている。

*L'homme est né libre,  
et partout il est dans les fers.*

ジャン＝ジャック・ルソー

Sample

依存症の零度

目次

Sample

## 第1章 零度の風景

- 第1節 零度の風景 14
- 第2節 J Pの依存症 20
- 第3節 「僕」の世界 29

## 第2章 先駆するアヘン

- 第1節 一九世紀のイギリス社会とアヘン 36
- 第2節 アヘンの光と影 43
- 第3節 薬物の「依存用語」の変遷 49
- 第4節 わが国の「依存」用語の変遷 55

## 第3章 alcoholism とその視座

- 第1節 alcoholism 64
- 第2節 アルコールに対する認識と一九世紀のヨーロッパ 65
- 第3節 マグヌス・フスの眼に映ったもの 73
- 第4節 マジカル・ジェリネック 81
- 第5節 ジェリネックのalcoholism 86

## 第4章 依存概念の本流の軌跡

- 第1節 宙づり状態にあえて留まりつづけられること 102
- 第2節 薬物規制と「依存」概念の形成 103
- 第3節 薬物依存としてのアルコール症とその展開 108
- 第4節 グリフィス・エドワーズとアルコール依存症 113
- 第5節 主流の依存症概念のその後 119

## 第5章 行動薬理学的依存

- 第1節 一九五三年の胎動 126
- 第2節 オールズと脳内自己刺激実験 128
- 第3節 デノー、柳田、シーバースと薬物自己投与実験 138
- 第4節 動物の依存から人間の依存へ 148

## 第6章 病的飲酒パターンと強化された探索行動

- 第1節 行動薬理学からみた依存症の症状 164
- 第2節 病的飲酒（摂取）パターン 166
- 第3節 強化された探索行動 181
- 第4節 二つの症状の関係 196

第7章 四つの喪失

- 第1節 四つの喪失をめぐって 200
- 第2節 家族の喪失 203
- 第3節 社会的喪失 207
- 第4節 人格の喪失 218
- 第5節 個体の喪失 222
- 第6節 四つの喪失を越えて 230

第8章

堰き止める、巻き戻す

- 第1節 流れを堰き止めること 237
- 第2節 巻き戻していく、すなわち、繰り返しやめ続けること 242
- 第3節 依存症の退薬過程の生物学的要因 258

第9章

離脱症状

- 第1節 退薬後の経過のスケッチ 262
- 第2節 二葉亭四迷の眼差し 266
- 第3節 「離脱」という症候群の誕生——ビクターと以前、以後 272
- 第4節 離脱の「依存」への取り込み——ジェリネックとその後 279

第10章

専門病棟と時代背景

- 第5節 離脱症状と依存 283

- 第1節 はじめに 290
- 第2節 傷痍軍人と医療 291
- 第3節 アルコール専門病棟の誕生 293
- 第4節 なだいなだとその時代 305
- 第5節 久里浜方式という表象 311

第11章

遷延性退薬徴候

- 第1節 奇妙な光景 330
- 第2節 小宮山徳太郎と武蔵病院 332
- 第3節 遷延性退薬徴候 335
- 第4節 治療の風景 340
- 第5節 遷延性退薬徴候への眼差し 346
- 第6節 遷延性退薬徴候とジアゼパム結合阻害剤 351
- 第7節 遷延性退薬徴候からのメッセージ 356
- 第8節 未完の遷延性退薬徴候 367

## 第12章 逆耐性現象

- 第1節 「慣れる」ということ 374
- 第2節 病的飲酒パターンへの加速度的な進展 376
- 第3節 逆耐性現象の研究 379
- 第4節 アルコール含有物と逆耐性現象 383
- 第5節 逆耐性現象をめぐる日常診療 390
- 第6節 逆耐性現象から何を引き出すか 400

## 第13章 二次性強化因子

- 第1節 象徴という現実 406
- 第2節 二つの強化因子 408
- 第3節 9と想像力の零度 414
- 第4節 浮遊するゼロ 417
- 第5節 再摂取を防ぐために 422

## 第14章 後遺障害

- 第1節 日本文学の中の脚気 430
- 第2節 脚気の時代と米 433

## 第15章 依存症を生きる

- 第3節 もうひとつのビタミンB<sub>1</sub>欠乏 440
- 第4節 認知症 448
- 第5節 前頭葉機能障害 452
- 第6節 精神病 459
- 第1節 微分的に生きる 474
- 第2節 ていねいに生きる 478
- 第3節 未来から生きる 481
- 第4節 さりげない喜びを生きる 485
- 第5節 生きる意味を探して生きる 490
- 第6節 「依存症に生きる」を生きる 496
- 第7節 期間を区切りながら生きる 503
- 第8節 淡々と生きる 505
- 第9節 心の傷のなかに生きる 509

あとがき 517

文献リスト 527

事項索引 537

人名索引 547

## 凡例

- 一、本書では、多くの事例を取り上げ、依存症の方々について具体的に記述している。その際、個人情報保護の観点から、表現を工夫したり、内容を全体の趣旨を損ねない程度に変更するなどして、個人が特定されないように配慮した。
- 二、本書において、とくに引用のなかに、今日の人権感覚からすれば差別表現に当たるとされるような表現が含まれている。しかし、それらの削除あるいは書き換えを行うならば、当時の時代状況を想像しにくくなり、内容の把握も不十分になることが懸念されるため、該当箇所は原文のままとした。
- 三、本書は、第1章から順に読み進めていただくことを想定しているが、各章の内容は比較的独立しており、読者が興味を持たれた章から読んでいただいても構わない。

Sample

零度の風景

第 1 章

Sample

## 第1節 零度の風景

J.Pはそのころには二十代の半ばになっていた。家も買おうとしていた。人生は幸福だったよ、と彼は言う。「いろんなことがとてもうまく運んでいたからね」と彼は言う。「ほいものはみんな手に入れた。可愛い妻も子供もいるし、仕事だって望みどおりのものだった」しかしどういっわけか——我々が何をするか、なぜそうするかなんて、いったい誰にわかるだろう——酒量は増えていった<sup>1)</sup>。

アルコールや薬物はいつのまにか私たちに忍び寄ってきて、知らない間に私たちを蝕んでしまう。そのような得体のしれない性質を、私たちは依存症と呼んできた。アルコールや薬物の依存症とは何か。依存症の概念がつけられてきた歴史を振り返ってみると、依存症は、どういっわけか捉えることが容易ではない現象であるらしい。そこで私たちは、依存症とは何かを説明するために、何らかの視点に立って、固有の角度から依存症を眺めてきたように思われる。それらの説明はそれぞれに依存症の性質の一端をとらえていた。しかし、ある視点から見ると、依存症はときに奇妙なニュアンスを帯びてしまい、それがそのまま独り歩きする結果になりかねなかった。また別の視点からは、依存症というありのままの現象がいつのまにか過剰な意味

を抱え込んでしまうことになった。

依存症は「精神的な先天的欠陥」である。著名な薬理学者、宮崎三郎は、一九四七年に出版された一般向けの薬理啓蒙書『薬効分析』の中で「モルヒネ中毒」をそのように規定した<sup>2)</sup>。つまり、依存症とはある種の精神的傾向をもった人に発症する心の病気である。今日では、さすがにその種の心因論を全面的に展開するような依存症観を耳にすることはめったにない。せいぜい過去の悪しき例として引き合いに出される程度であろう。しかし、依存症の性格因論が完全に過去のものになったかという点、そのようにも思われない。残念ながら、依存症への忌避感の一部は、その原因にある精神的傾向をもつ人の心理に求めることによるものだろう。実際、依存症に陥った人のなかに性格的偏りを感じさせる人もいるにはいるが、そう感じさせない人もたくさんいる。そればかりか非常に優れた人格の持ち主もいる。

板橋登子らによると依存症は幼少期からの困難な体験に基づいて形成される。すなわち、小児期に親から虐待されて過ごしたり、両親と離別しずっと孤独のうちに大きくなったり、親が薬物を常用するといった強いストレス環境下に置かれていたりなど、不遇な生育歴から他者を信頼するという感覚が育たなくなった結果、依存症が惹起されるというのだ<sup>3)</sup>。心因に社会的要因を組み込んだこの仮説は、人への愛着や人との信頼関係の障害に焦点を当てることによつて、そのような依存症の人にびたりと寄り添うことができる。しかし、その視野の外にいる依存症の人びとを捉えることは難しい。たしかに幼少期の逆境体験に代表される凄まじい人生に、アルコールや薬物がいわば表面的な理解者として入り込んできたような人もいる。しかし、

とくに不自由なく暮らしてきたのに、いつのまにか歯車が狂い始めた、そのような依存症の人もいる。その場合、この仮説は、こうした「普通」の人生の依存症者とは噛み合わない。ときに自分の人生について無益だと思えるような深掘りをしている依存症の人に出会うことがある。依存症は現在の環境への不適応から生じる。たとえば妻との関係がうまくいっていない、職場での付き合いが難しい、悩みを打ち明けられる人がいないなど、多くは対人関係上の困難さが問題となるようだ。アルコールや薬物はそのような環境からの逃避として忍び込んでくる。そして、満たされない感情を埋め合わせる結果として依存症に陥る。このような視点からは、極論すると依存症は対人関係の病理を基底にもつということができると\*4。これは社会的要因が多くを占める心因的理解といってもいい。たしかにストレスは依存症への入り口になりうる。しかし、ストレスがすべての人を依存症に導くわけではない。逆に、依存症が解決されなければストレスも解消されないことも多い。たしかに、対人関係の拙さは依存症の扉を開けることにつながりうる。しかし、対人関係が苦手であるという評価は、依存症の人への単なる後付けのラベリングかもしれない。実際には、不器用さが目立つ依存症の人もいるが、これまででそうなく生きてきたように見える人もいる。要領の良い人でも依存症になるときはなる。

専門的な精神療法を通して依存症を眺めてみると、それはどのように説明できるだろうか。たとえば、認知行動療法の視座からは、依存症は間違つて形成された習慣だと映ることになる。したがって、それらは脱習慣化しなければならない。力動的には、依存症は無意識のうちにある死への衝動と映るかもしれない。したがってそれらを意識化しなければならない。精神分析を依存症の治療に用いることはないが、認知行動療法は依存症の治療にはすぐれて実践的である。「間違つて形成された習慣」「無意識の死への衝動」は、依存症を語るフレーズとしてはたしかに洗練されている。しかし、その表現の格調が説明のための説明に感じられるといつても過言ではなからう。それらはまるで壮大な物語のなかに設定された架空の町、ジェファソンやマコンドを眺めるような感覚なのだ。したがって、依存症の人は、認知行動療法的に依存症を説明されても、自分のなかで何が起こっているのかについて手ごたえを感じることができないだろう。それはあくまで治療手段なのであって、説明手段ではない。

アルコールや薬物の依存症をもつともシンプルに、純粹に眺めることができるとしたら、それはどのようなものなのだろうか。それにもっとも近づいたということができるといりがレイモンド・カーヴァーであろう。彼は飾り気のない依存症を直感的に捕まえていた。それは、あたたかも、どんなフィルターも通さず、裸眼で眺めた依存症の零度の風景である。

物事はなんらかの判断の枠組みを通して認識される。その枠組みを準拠枠と呼んでおこう。現象が複雑であればあるほど、どのような準拠枠を用いるべきなのか、一筋縄ではいかなくなる。問題は、選択された準拠枠がどれほど確からしいかにある。

ある程度依存現象が知られるようになって以降、アルコールや薬物による依存症を定義づけようとするメインストリームは、他の疾患と同様に、生物学的な見方、とくにこの分野では薬理学的な見方に依拠してきた。このことは、医学が科学を基盤とするかぎり、わざわざ記す必要がないくらい自明のことだ。ところが、依存症の捉えにくさもあってか、その方向に沿って

はなかなか先へ進まないできた。その結果、いくつもの準拠枠が現れ、その枠に沿って様々に解釈されてきた。依存症概念の仮説が多岐にわたるとしたら、他の臨床分野に比べて、この分野がそれほど難しいということなのか、そうでなければ、要因はともあれ、依存症の疾患理解が順調に育ってこなかったということなのだろう。

では、アルコールや薬物の依存症を見るための準拠枠として、何を選ぶことがもっとも妥当なのだろうか。ここでとりあげるのは行動薬理学的依存である。依存症は生物学的な現象である以上、より進歩した精緻な科学的意匠で説明できた方がよい。生物学も要素還元的に発展してきたことから、できるかぎり分子や遺伝子のレベルで理解できるものであってほしい、しかし、分子生物学や遺伝学から臨床的な全体像を説明することは、少なくとも現時点では難しい。部分的に可能だとしても優れた効果を発揮する臨床応用にはまだ達していない。依存症の理解には、今もなお、遺伝学や分子生物学に比べるとクラシクな薬理学がもっとも適していると考えられる。もともとより行動薬理学的依存という準拠枠は絶対的なものではない。だが、動物の行動を通して、依存症を可視化できるという点で優れている。そして、もうひとつ、依存症の他のどの説明仮説にも排他的でないことは強調してよい。むしろ、すべては行動薬理学的依存の上に積み上げることが可能なのだ。そうやって積み上げられた説明様式の全体は、多様な依存症を照らし出す見取り図になりうる。

これを日常的な表現に置き換えると、さらにこの準拠枠の特徴が浮かび上がってくる。すなわち、依存症とはアルコールや薬物を「繰り返し、繰り返し」摂取することで成立する脳の病気である。ということは「繰り返し、繰り返し」摂取しないと依存症にはならない。「繰り返し、繰り返し」摂取することに理由があってもなくても構わない。「繰り返し」事実そのものが重要なのである。逆境体験や対人関係の病理があっても依存症になりうるし、なくてもなりうる。強いストレスがかかっても、お酒の飲めない体質であれば、アルコール依存症になるはずがない。どのくらい繰り返しれば依存症になるのかは、依存をもたらしうる薬物種、個体差が関係するのだろう。一方、「繰り返し、繰り返し」摂取した結果あらわになる忌まわしい事態は、時間の経過とともに膨れ上がっていくであろう。

以下で描きたいことの主要なひとつは、依存症が「繰り返し、繰り返し」摂取することで生じる、行動薬理学的メカニズムについてである。「我々のしでかすことの意味や目的」は分らない。ただどういうわけか「酒量が増えていった」。このシンプルな表現の背景には、私たちの存在の意味を問うような背景が隠されている。描きたいことのもうひとつは、そのような依存症から抜け出そうとする道についてだ。それは、アルコールや薬物を摂取しないことを「繰り返し、繰り返し」続けるといふ同型反復にある。依存症は長い時間をかけてひたひたと静かになってくる。そこから遠ざかるには、逆向きの道を淡々とゆっくり歩いていくのだ。今度は我々のしでかすことの意味や目的を確かめながら。

## 第2節 J Pの依存症

レイモンド・カーヴァーは、村上春樹の翻訳によって、日本でもよく知られている作家である。彼の『ぼくが電話をかけている場所』は、一九八三年に出版された短編集『大聖堂』に収められている。村上は、それを「ヘミングウェイやフィッツジェラルドのいくつかの短篇が時代を超えた古典として長く読みつがれているのと同じように、これから読みつがれていく作品のひとつになるだろう」\*と高く評価した。しかし、この作品が優れているのは文学的価値によるものだけではない。アルコール依存症がほとんど純粹な形で描き出されている。その描写が純粹であればあるほど、表現される世界は深みを増す。この作品の淡々とした語り口に深みを感じる理由のひとつはこの点にあるのだろう。カーヴァーは、一九三八年、オレゴン州に生まれ、一九歳で結婚した。その後、職を転々とするかたわら執筆を行った。彼自身もアルコールに苛まれた人生であった。

フランク・マーティン・アルコール中毒療養所が『ぼくが電話をかけている場所』である。主人公の「僕」はここに二日前にやってきた。クリスマスの数日後である。これが二回目の入所であった。J Pことジョー・ペニーも同じ日に入所した。彼は初めてなので、「僕」の目には怯えているように映る。J Pは、この施設の他の連中と同様、とびっきりの飲んだくれだ。彼の

職業は煙突清掃人、年齢は僕より少し若い三〇歳前後。J Pは僕に両手でふりをつけて話そうとするのだが、手が震えている。「これまでこんななかつたんだけどな」。それにたいして僕は言う。「わかるよ……でも震えは治るもんだからさ。それは嘘じゃない。ただそれまでに時間がかかるだけだ」。この作品は、「僕」がJ Pの語ることに、穏やかに耳を傾けることで進んでいく。そして僕の語り口も、どこまでも端然としている。

ハイスクールを卒業したものの、これといってやりたい仕事も思いつかないJ Pは、ある日、友人の自宅で一緒にビールを飲んでた。一八歳か一九歳のことである。そこへ煙突掃除の女性が入ってきた。トップハットをかぶったその女性はロキシシーという。J Pは彼女を見てくらからする。そして彼女の仕事ぶりにずっと目を奪われる。彼女にとって煙突清掃業は、父親や兄弟とのファミリー・ビジネスだった。ロキシシーは煙突掃除を終えて帰り際に、友人にひと言、「お望みならキスしてもいいわよ」と言う。「幸運のおまじないってことになってるの」と。このときJ Pの風景は一変した。J Pは友人につづいて彼女と唇を合わせる。その後、少しずつJ Pとロキシシーとの関係は深くなる。一緒に映画に行ったり、ときに踊りに行ったりした。もつとも、彼らは恋人時代を主に二人で煙突掃除をすることで過ごした。いつしか二人は一緒にいることを話し合っていた。J Pの人生は順風満帆だった。

そしてやがて二人はめでたく結婚する。J Pの新しい義父は彼を共同経営者として受け入れてくれる。一年ばかりあとでロキシシーは子供を出産する。彼女は煙突清掃の仕事をやめた。

少くとも実際に労働することはやめた。ほどなく彼女に二人めの子供が生まれた。J Pはそのころには二十代の半ばになっていた。家も買おうとしていた。人生は幸福だったよ、と彼は言う。「いろんなことがとてもうまく運んでいたからね」と彼は言う。「ほしいものはみんな手に入れた。可愛い妻も子供もいるし、仕事だって望みどおりのものだった」しかしどういうわけか——我々が何をするか、なぜそうするかなんて、いったい誰にわかるだろう——酒量は増えていった。

人生が暗転する理由はしばしば後からくつついてくるものだ。しかも、いくつかは突然暗転する。J Pの人生の歯車はいつしか狂いだしていった。彼の場合、人生の暗転はゆっくりと忍び寄ってきて、気がつけば途方に暮れている自分を発見するような仕方であった。カーヴァーはこのあと次のように続ける。J Pのいつもの日常生活に、ひたひたと染みるようにアルコールが紛れ込んでくる様子が描写されている。

長いあいだ彼はビールばかり飲んでいた。どんなビールでも、ビールでさえあればよかった。ビールだったら一日二十四時間だって飲んでいられたよ、と彼は言う。夜になるといつもテレビの前に座ってビールを飲んだ。まあほんの時たまもっと強い酒を飲むこともあったけれど、それは町に出た時や、客のある時に限られていたし、彼らはあまり町に出る方ではなかった。しかしある時点から、どうしてそうなったのか本人にもよくわからない。ただけれど、彼はビールをやめて、ジン・トニックを飲むようになった。そして彼は夕食後にもテレビの前に座ってジン・トニックを飲んだ。彼の手には常にジン・トニックのグラスがあった。ジン・トニックの味がすごく気に入っちゃったんだよ、と彼は言う。仕事が終わると、家に帰る前にちょっと寄り道して何杯かひっかけ、家に帰ってまた何杯か飲むようになった。そのうちにちよくちよく夕食をすっばかすようになった。ぜんぜん帰ってこないか、帰ってきてても料理には手もつけなかった。バーのつまみで腹がいっぱいなのだ。時々彼は家に帰ってくるとべつにたいした理由もなしに玄関から弁当箱を居間に向かって放り投げた。ロキシーが怒ってどなると、彼はくると背中を向けてまた外に出ていった。酒を飲み出す時間が昼下がりになった。それはまだ仕事をしているはずの時間だった。朝、仕事に出る前にも何杯か飲んだね、と彼は言う。歯を磨く前に一杯やるのさ。それからコーヒーを飲む。弁当を入れるボックスの中に、魔法瓶につめたウォッカを忍ばせるようになった。

J Pはアルコールを「繰り返し、繰り返し」飲む。すると彼の飲酒にいくつかの変化が現れる。もっとも本質的な変化は、飲酒の仕方が不規則になり、かつ合計の飲酒時間も長くなったことだ。つまり、仕事をしているはずの昼下がりから飲酒が始まる。朝、出勤前にもアルコールが入る。要するにでたらめなのだ。このことは、正常飲酒パターンから病的飲酒パターンへの変化を意味する。病的飲酒パターンこそ、まさしく依存症の主症状である。もうひとつ、それにもなっ

通常では見られない行動が現れる。すなわち、弁当と一緒に魔法瓶にウォッカを忍ばせるようになったこと。それは、いつでもどこでも簡単にアルコールを摂取するための工夫のひとつだ。これは強化された探索行動と呼ばれている。おそらくJPは、他にも同様の工夫を重ねているだろう。強化された探索行動は依存症のもうひとつの症状である。さらに、ビールがジン・トニックに変化したことが注目される。それは何を意味しているのか。好みが変わったわけではない。どうしてそうなったのか本人にもわからないからだ。ビールでは酔い足りなくなった。だからより度数の強いジン・トニックに変わったのだ。そのような現象を耐性の増大という。アルコール依存症では耐性の著しい増大が見られる。JPは後にジン・トニックの味がすぐく気に入ったと付け加えているが、脳報酬系の挙動を合理化したものに過ぎない。次に、これらの変化により、JPと彼の家族にどんなことが起こるのだろうか。

JPとロキシーは何度か本物の喧嘩をした。なぐりあいのことだよ。JPは言う。一度なんか彼女は俺をこぶしでなぐって鼻を折っちゃったんだ。「ほら見てみなよ」と彼は言う。「ここだよ」彼は僕に鼻筋を横切っている線を見せてくれる。「鼻が折れてんだ」彼もお返しをした。一度は彼女の肩を脱臼させた。別の時には彼女の唇を切った。二人は子供たちの前でなぐりあった。事態はもう收拾のつかないところまで来ていた。それでも彼は飲みつづけた。やめることはできなかった。何をしても彼が酒をのむのをやめさせることはできなかった。ロキシーの父親と兄たちにごんごんやると脅されてもだめだった。

彼らはロキシーに、子供たちをつれてあんな奴とはわかれちまえ、と言った。

JPの人生は幸福だった。なぜなら可愛い妻と子供がいたからだ。しかし、今は幸福とはほど遠いところにいる。その妻と殴り合いを繰り返して、義父や義兄からは敵意の対象にすらなってしまう。大切な家族が破綻寸前である。この両極を媒介するものは、JPのもともとの性格やそもそもの家族関係にあるのではない。ただひとつ、アルコール依存症だけだ。アルコール依存症は幸せな家族を破壊する力を持っている。続けてカーヴァーは次のように書く。「それでも彼は飲みつづけた。やめることはできなかった。何をしても彼が酒をのむのをやめさせることはできなかった」。それでも飲み続ける。やめることができない。カーヴァーは端的に依存症の内的世界を表現している。依存症をその人の内側から眺めるならば、強い欲求、すなわち渴望感と、どうしてもやめることができない感覚、抑制困難感で定義することができるからだ。

そんなJPに対して、ロキシーは意外な行動に出る。父や兄たちに離婚を迫られるが、「これは私の問題よ……こういうことになったのも自分のせいなのだから、自分で解決しますから。」ロキシーはこう言って自分なりの解決策を模索する。そのひとつがボーイフレンドを見つけたことだった。

彼女の考え出した打開策は突飛だ。しかし、見事なまでに絶妙であった。なぜなら、彼女はJPを見捨てない、そのためにあえて距離をとる、しかも単に距離をとるだけではなく、自分

の人生をそれでも楽しいものにしてしようとしたからだ。ここには依存症に向かい合うための家族側のテーマを見てとることができる。依存症者を見守りつづけることと自分の人生を豊かなものにする、通常は矛盾する難問をいかに解くか。ロキシ一の見、奇抜な行動は、この難問に対する彼女なりのよく考えられた答えであった。それが正解だったかどうかはすぐには分からない。すなわち、答え合わせは、将来に行われるべきものだ。

とにかく彼はそれに——ロキシ一がボーイフレンドを作ったことに——気づき、怒り狂った。彼はむりやりロキシ一の指から結婚指輪をむしりとり、ワイヤ・カッターでずたずたに切ってしまう。ああ、気分良かったねえ。この時すでに二人の喧嘩は第三ラウンドあたりには達していた。翌朝、仕事に行く途中、彼は飲酒運転で逮捕される。免許証を取り上げられる。車を運転して仕事に行くことができなくなる。でもまあいいさ、と彼は言う。その一週間前に酔っ払って屋根から落ちこちて親指を折ってたんだけだ。まあ首を折るのも時間の問題ってどこだったな。

第三ラウンドに達したのはJ Pとロキシ一の喧嘩だけではない。アルコール依存症のステージそのものが第三ラウンドに達した。それはどういうことか。依存症は家族を破壊するだけにとどまらない。やがては依存症の人びとの社会生活を破壊してしまう。さらには、かれら自身の身体を破壊してしまうのだ。

J Pは飲酒運転で免許証を取り上げられた。車を運転できない以上、仕事に行くことができなくなる。このようなことでは、たとえ仕事に行っても信用を落としてしまうだろう。その結果、収入が得られなくなり、経済的に困窮することも想定せざるを得なくなる。満ち足りた社会生活とその破綻を媒介するのは、たったひとつ、アルコール依存症にほかならない。また、J Pは、酔っ払って転落し、親指を骨折してしまった。首を折るのも時間の問題だということ。これは、事実上、亡くなるのも時間の問題だということだ。このように、健康とその破壊とを媒介するのも、ほかでもないアルコール依存症だけなのだ。

家族を失い、仕事を失い、健康を失い、その行き着く先は自分を失うこと、すなわち死である。J Pは、アルコールによって、かなりのものを失い始めていた。アルコールを断つことができなければ、やがてJ Pは孤独のうちに亡くなるであろうことは十分に想像できる。しかし、カーヴァーはJ Pにそれとは異なる道を歩ませる。どんな道か。

彼は禁酒し、人生をもとの軌道に戻すためを考えるために、このフランク・マーティンの療養所にやってきた。しかし誰かに強制されてここにいたわけではない。僕だってそうだ。我々は監禁されてはいないのだ。もし出ていきたいと思えば、いつだって出ていくことはできた。

カーヴァーがJ Pに用意したのはフランク・マーティン療養所であった。J Pがこのままで

はいけないと思っていたのは確かだ。そう思ってアルコールをやめることができるなら、どうということもない。しかし、そんなJ.P.のあえかな思いにとって、療養所は、これから禁酒の道を行んでいくための現実的なきっかけであった。ところで、J.P.と療養所はどのようにして接続されたのだろうか。

その日の午後おそく、玄関のドアがぱたんと開いて、J.P.が二人の大柄な男―あとでわかったことだが、義父と義兄だ―にはきまこまれるようにして運び込まれてきた。彼らはJ.P.をつれて部屋を横切り、年嵩の方が彼の入所書類にサインし、フランク・マーティンに小切手を渡した。それから二人はJ.P.を二階につれていった。たぶんベッドに押しこんだのだろう。まもなく年取った男ともう一人が下りてきて、玄関の方に向かった。こんなところに長居は無用という感じだった。一刻も早く手を切りたがっているように見えた。

J.P.は少々荒っぽい仕方療養所と接点を持った。フランク・マーティンも、フランク・マーティンへのつながり方も、J.P.に固有のものだ。同様に、人にはそれぞれ「フランク・マーティン」があり、その人だけの「フランク・マーティン」との接続方法がある。微かな禁酒への思いを形にする第一歩とは、どうであっていい、とりあえずアルコールをやめてみることに、このことに他ならない。日常生活になんら変更を加えることなくそれが自然にできる人もいる。家族や友人などの真剣なまなざしに導かれて一念発起する人もいる。なんらかの契機が事態を

劇的にひっくり返すこともある。任意性に委ねてはまったく埒があかないこともある。いづれにしても依存症からの離脱は、やめればやめるほどやめやすくなる。カーヴァーはその起点のひとつを提示しているのである。

### 第 3 節 「僕」の世界

J.P.とは対照的に、主人公の「僕」についてはあまり多くは描かれていない。しかし、記述の断片をつなぎ合わせると「僕」の人生の輪郭が見えてくる。一度目のフランク・マーティン療養所は、妻に連れてこられた。このときの心象を「僕」は次のように回想している。「僕はある部分では救われたがっていた。しかしまた、僕の中には違う部分もあった」。結局、この両個性を克服することができなかつたのであろう、「僕」は二度目のフランク・マーティンとなった。しかも、今回はガールフレンドに連れてこられた。回想は現実をしばしば現実から遊離した空想の産物に置き換えてしまう。しかし、「僕」の一度目のフランク・マーティンでの心象風景は限りなく等身大のものであったにちがいない。カーヴァーは、『ぼくが電話をかけている場所』を初めて訪れたJ.P.と二回目の「僕」を交差させる。しかも、J.P.の生活史は系統的に描かれているが、「僕」にかんする記載は断片的で曖昧だ。そのような二人の絡み合いがこの短編にある種独特な奥行きを作りだしているのと同時に、依存症の暗い影、すなわち再発に光を当てて

# Sample

## あとがき

はじめに、私との対話に多くの時間を割いてくださった依存症の方々に感謝したい。また、私にいろいろな学ぶ機会を与えてくださった小宮山徳太郎先生、堀達先生ほか、医療関係者の皆様に感謝したい。そのうえで、この書物ができるに至った背景に触れておきたい。

きっかけは十年以上前のことである。当時、私の勤務していた精神科病院に、突然、ある男性が訪ねてきた。彼は、患者でも、医療関係者でもない。そのような人物が、病院に約束なく突然訪ねてくることはまずない。しかし、彼は訪ねてきた。そこには伏線があった。

私が怠惰な学生だった頃、その彼の下宿に突然押しかけたことがあった。なぜそうしたかは覚えていない。けれど、彼は快く私を迎えてくれた。私にはそのように思われた。彼の下宿は

手狭なのに、なぜか広々として見えた。そこには大きめの古風な感じの木の机があり、その上には当時、まだ多くはなかったノート型のパソコンが置かれてあった。そこで、彼とはボブ・ディランやバド・パウエルについて話したかもしれない。くだけた話や浮いた話もあっただろう。「バグダッド・カフェ」や「ニュー・シネマ・パラダイス」を寸評し合ったかもしれない。しかし、どんなことを話したかはほとんど覚えていない。ところが、今でも強く印象に残っていることがある。それは彼の本棚であった。本の配置が奇妙なのだ。十冊ほど置かれてあるかと思えば、あとは空間。遠目に眺めると、がらんとした隙間が目立った。読んだ本は処分するのだという。それからもうひとつ、彼は小説や映画や音楽や哲学によく通じていたはずなのに、そのどれでもなく、「写真に興味がある」と言ったことだ。たしかに本棚に写真論にかんする書物があるのを目にした。おそらくそれはロラン・バルトの『明るい部屋』だったように思うが、自信はない。一九九〇年頃のことであった。

私の職場に大隅直人氏が、私からすれば唐突に現れたのは、それから二十五年近くたった頃である。彼は次のようなことを語りだした。大隅君と私との共通の同級生がアルコール依存症であった。その同級生は調子のいい時期もあったようだが、思うようにならず、結局は自殺した。私は、正直、戸惑った。勤務の時間中に落ち着いて聞くことができる話ではないと感じたからだろう。それからしばらく、とりとめもない話をしていただと思う。そして、何か書かないかと勧めてくれた。私はてっきり、小説の感想文集くらいのことだろうと思った。ただ、その

当時取り組んでいたことがアルコール・薬物依存症だったので、依存症についてなら何か書くことができるかもしれないと思った。大隅君から、私が依存症治療に関わっているのを把握していたこと、自殺した依存症の同級生のことを年余にわたり私に伝えたいと思っていたことを知ったのは、ずいぶん後になってからだった。

では、なぜ大隅君は突然私の職場にやって来たのか。彼はクールに「仕返しだ」と言った。多くを語らない語り口を含め、彼らしいと思った。そう、この書物は、大隅君による約二十五年後の仕返しから生まれたものである。

アルコール・薬物依存症については多くのことをここまで精一杯書いてきた。あらためて付け加えることはないのだが、ひとつだけ書き留めておきたい。

今年、戦後八十一年にあたる。基本的な人権思想と結びついた民主主義は近代のもっとも偉大な発明品だ。その欧米の発明品は、終戦直後、わが国に一気にもたらされた。わたしたちがそれをともともと望んでいたと言おうが、外圧によって強制的に押しつけられたと言おうが、その発明品は、わが国においてせいぜい八十年ほどの歴史しかない。この間、私たちの民主主義はまがりなりにも持ちこたえてきた。だがそれはいつの間にか空気ほどに薄まってしまい、民主主義擁護の気炎も空虚な記号にすぎなくなった。そんな印象がある。翻って、民主主義の出生地である欧米でさえも、今日、民主主義がどこか胡散臭い、きれいごとにすぎないものとして

敬遠される風潮があるように見える。しかし、すぐ近くには、世の中の不満を声に出して言う  
と身の危険につながる国も多い。政府の顔色をうかがってなりをひそめて生きるよりも、堂々  
と不平をぶつけることができる社会であってほしい。一方、民主主義もそれ自体、危なさを  
孕んで<sup>はら</sup>いる。ヒトラーは民主的な手続きにより登場した。民主主義が独裁的な政体をつくって  
しまう危険を古代ギリシャ人はよく知っていたがゆえに、彼らは民主主義をそれほど評価して  
いなかった。もっとも、当時の民主主義に基本的な人権思想はなかったが、いずれにせよ、民主  
主義を維持するのにかかるの労力を要することはすでに歴史に刻み込まれている。

戦後まもなくの一九四八年（昭和二十三年）と一九四九年（昭和二十四年）に上下二巻に分けて出版  
された『民主主義』という書物がある。これは文部省著作教科書で、一九五三年（昭和二十八年）  
まで、中学生と高校生の社会科教科書として使用された。表現には熱気が漲<sup>みぎ</sup>っている。文章を  
いくつか引用する。

…民主主義を単なる政治のやり方だと思ふのは、まちがいである。民主主義の根本は、もつ  
と深いところにある。それは、みんなの心の中にある。すべての人間を個人として尊敬な  
価値を持つものとして取り扱おうとする心、それが民主主義の根本精神である。

民主主義は、決して単なる政治上の制度ではなくて、あらゆる人間生活の中にしみこんで  
行かなければならないところの、一つの精神なのである。

すべての人間を個人として尊重し、したがって、すべての個人の自由と平等とを保障し  
ようとする民主主義の原理は、どこへ行っても同じであり、いつになっても変わらない。  
しかし、民主主義は、長い歴史的発達の産物であり、その具体的な形態は、これまでも  
時代によって変化して来たし、これからも絶えず発展を続けて行くであろう。

民主主義の原動力は、国民の自分自身にたよっていこうとする精神である。自らの力で  
自らの運命を切りひらき、自らの幸福を築き上げていこうとする、不屈の努力である。

民主主義の理想は、人間が人間たるにふさわしい生きがいのある生活を営み、お互<sup>マ</sup>の協力  
によって経済の繁栄と文化の興隆を図り、その豊かなみ<sup>マ</sup>のりをすべての個人によって平和  
に分ちあうことができるような世の中を築いていくにある。

アルコール・薬物依存症は、大切なものをいくつも失う可能性のある事態である。経済的苦境  
もそのひとつである。著しい経済格差は、民主主義が成り立つための基盤を切り崩しうる。また、  
依存症状態にあることは、個人としてなかなか尊重されにくい。そうであっても、民主主義  
が「その根本において社会生活のあり方であり、社会生活を営むすべての人々の心の持ち方」  
であるならば、依存症を生きていくことは、それもまた民主主義を支えていくことだ。そう書

くと擲揄や茶化しの対象になるのだろうか。けれども、そう思う。そして、そのことは後の世代にも伝えられるべきことだ。

途中、無理かと諦めかけた作業もいよいよゴールにたどり着こうとしている。ここまで伴走してくれた大隅直人氏と彼のチームの皆さまには深く感謝申し上げる。大隅君は、長きにわたってほとんど何も語らず、ただひたすら私を励まし続けてくれた。そして、ときにいただいたアドバイスに、私は何度もしっかりと受け取った。田中奈保生氏には、緻密で行き届いた校正を担当していただいた。田中さんのご指摘は私にとって大変勉強になった。早川宏美氏にはいくつもの素敵な絵を描いていただいた。早川さんの絵を眺めているとじわじわと心が満たされていく。田中聡氏には組版を担当していただいた。田中さんのプロフェッショナルな仕事はとても心強かった。

それから、栗崎信寛氏に感謝したい。全日本空輸株式会社では多くの方々にお世話になった。なかでも、最後の上司、栗崎さんに出会えたことは私の人生の幸せである。その栗崎さんも若くして亡くなった。

そして、最愛の妻と娘に感謝したい。私が幸福な日々を過ごすことができるのは、妻と娘のおかげである。とくに、妻と一緒にいる時間はなにもにもかえがたい。

最後に、私の両親に感謝したい。あの忌まわしい新型ウイルスが猛威を振るうなか、父親は母親を施設に入れたあと逝ってしまった。母親は認知症がひどくなり、私が誰だか分からな

いことが多い。私は両親に何もしてやれなかった。私が単著を出版することができたことが、せめてもの報いになればと願っている。

二〇二六年一月、雪の降りしきる郷里にて

中田千尋

# 依存症の零度

2026年7月28日 第一刷発行

著者 中田千尋

発行者 大隅直人

発行所 さいはて社

滋賀県草津市新浜町8-13 〒525-0068  
tel. 050-3561-7453 fax. 050-3588-7453  
<https://saihatesha.com>  
[info@saihatesha.com](mailto:info@saihatesha.com)

装幀者 早川宏美

組版者 田中 聡

校正者 田中奈保生

印刷所 共同印刷工業

製本所 新生製本

Copyright ©2026 by Chihiro Nakata  
Printed in Japan  
ISBN 9912486-8-9

著者紹介

## 中田千尋

(なかた・ちひろ)

1967年京都府生まれ。

京都大学文学部哲学科社会学専攻卒業。  
全日本空輸株式会社勤務。神戸大学医学部卒業。

国立精神・神経センター武蔵病院  
(現 国立精神・神経医療研究センター病院)、  
国立国際医療センターにて研修。  
主に依存症、てんかんについて学ぶ。

その後、東京都内のいくつかの精神科病院、  
精神科クリニックで診療にあたり、現在に至る。